『アイスリンク』訳者あとがき

若いころ文学以上に、まず映画に強く惹かれ、自分で映画を作ってみたいと夢見ていたトゥーサンであるから、小説家として成功を収めたのち本格的に映画の道を歩み出すことになったのは当然のなりゆきだったといえるだろう。とりわけ小説第一作『浴室』の映画化（ジョン・ルヴォフ監督、一九八八年）にあたり、自ら脚本執筆を担当し、映画ができていく過程を間近に体験できたのは彼にとって決定的なことだった。映画監督になるためには特別な技術や専門的知識はかならずしもいらない、自分が何を撮りたいのかさえはっきり摑んでいるのならきみにも監督ができるはずだとルヴォフに励まされたトゥーサンは、

ついに一九八九年、『ムッシュー』の映画化によって監督デビューを果たす。九二年には『カメラ』を映画化。九四年にドイツのテレビ局の求めに応じて短編を一本撮ったのち、九八年、長編第三作『アイスリンク』（*La Patinoire*）を完成したのである。

こうしてトゥーサンの監督歴は、ふりかえってみればすでに十年におよぶわけだが、しかしそのキャリアの中で『アイスリンク』は、トゥーサン自身が認めているとおり、特別の重要性を持つ作品である。「素人監督」としての彼は、映画という表現手段の可能性をこれまで一歩一歩確かめながら歩んできた。まず『ムッシュー』で白黒の画面作りを試みたのち、『カメラ』で初めてカラーを手がける。そしていずれの場合も自作小説を出発点とし、小説の成果に支えられるようにして映画へと向かったのだった。だが『カメラ』では、タイトルが原題では『セヴィヤーヌ』と変えられたことに明らかなとおり、原作を離れ

た部分が大幅に増え、映画独自の世界を目指す姿勢が強く打ち出されたのである。

そして『アイスリンク』は、まさに映画監督トゥーサンの、小説家トゥーサンからの独立を告げる作品となった。初のオリジナル脚本に基づき、小説という経路を経ない映画独自の世界がここに実現されている。もちろん、それがトゥーサンの小説作品と共通した味わい、面白みを持つ世界であることは確かだろう。トム・ノヴァンブル（『浴室』の主人公を演じたトゥーサンの分身ともいうべき俳優）演じる監督のキャラクターは、現場を統率しスタッフ、キャストを思いのまま操る支配者といった映画監督像からはほど遠い。実行力に富む女性プロデューサーや女性助監督（演ずるのは『カメラ』以来トゥーサンと肝相照らす同志、ミレイユ・ペリエ）に頼りっきりで、アイスリンク経営者にスケート談義をさんざん吹聴されて閉口する打たれ弱さはムッシューそのもの

だし、ショットをてきぱきと撮り進めるよりも休憩ばかり挟みたがる脇に逸れがちの仕事ぶりは、『浴室』から『テレビジョン』にいたる怠け者の主人公たちを思わせずにいない。自分の作品は余白を重視し、間接的で遠回しで控えめであり、「ぼくにはどうしても何か形式を練り上げ、築き上げて、それで身を守る必要がある」云々といった、主演男優相手の言葉は、そのまま作家トゥーサンに当てはまる評言であり、照れまじりの自己パロディという趣さえある。

しかしながら、そうした読者にはもはやお馴染みのトゥーサン的特徴をふんだんに備えながら、『アイスリンク』が映画のみに許された、映画のみに可能な表現をいわば正面から潔く追求するフィルムであることを強調しておきたい。何しろこれは徹底したギャグ映画であり、そこではいっさいの鍵を俳優たちの身体と、ビジュアルな運動とが握っている。全体がアイスリンク上で繰り広げられる映画などというのはこれまたいかにも小説家トゥーサンらしい突飛で抽

象的な思いつきと見えるが、しかしそれは同時に『チャップリンのスケート』（*The Rink*, 一九一六年）のようなドタバタ喜劇の本道につながり、映画史の源泉と直結する、意外に正統的な設定であるともいえる。チャップリンの孫娘ドロレス・チャップリンが『アイスリンク』で本格的デビューを遂げる巡り合わせとなったのも、実は必然だったのかもしれない。そしてまた、初監督作『ムッシュー』撮影の際、トゥーサンにとって生涯初のショットとなった記念すべき場面が、体育館内でのフットサルのシーンだったことが思い出される。ゴールへ向かって蹴り込まれた球は大きく逸れて、横でトランポリンをしている人に命中、彼は気の毒に撃墜されてしまう……。屋内の限定された空間に弾けるスポーツの躍動と、そこに突発的に生じる変調を捕らえることは、トゥーサンが映画人となったその瞬間にすでに選び取っていた主題だった。そのフィジカルなギャク探求は『アイスリンク』でついに全面化するにいたったのであ

る。

『アイスリンク』が連なるもう一つの映画史的伝統、それが「映画作りについての映画」の系譜である。『アイスリンク』冒頭の、いきなりクレーンを用いての長まわし撮影はトリュフォーの『アメリカの夜』を思い出させずにいられない。あるいはそのさらに前の、タイトルにかぶさって聞こえる弦楽器の試し弾きの音は、フェリーニの――これは直接映画作りを扱った作品ではないが、しかし芸術創造の過程を描く映画という意味で主題を共有する――『オーケストラ・リハーサル』（一九七八年）を即座に想起させる。トゥーサンが述べるとおり、パゾリーニの何とも不思議な短編「リコッタ」も大切だろうし、その他先例をあげつらっていたらきりがない。ただし『アイスリンク』の明らかな特徴として、それが徹底してコミュニケーションの混乱――何しろフランス語、フランドル語、英語、リトアニア語、イタリア語が飛び交うのだから大変だ

――と、先にも触れた監督の弱腰を描き出している点が挙げられるだろう。苦悩、奮闘を経て作品完成へと雄々しく突き進む監督の創造神話はここでは完全にコケにされ、脱構築されている。しかもそうした脱構築が一切苦々しさを含まず、あくまでも軽やかに、晴朗になされていることが『アイスリンク』の独創性であるし、また全編に漂うどこか人のいいおめでたさ、下品さのまったくない楽しさこそはトゥーサン監督ならではの美質ではないだろうか。

笑いを誘うシーンが多々ある。そして同時に、たとえギャグがすべっても決して嫌な気分にはさせられない、そんな愛らしさが『アイスリンク』という映画の持ち味だ。

監督としての会心作であるに違いない『アイスリンク』のシナリオを本として刊行しないかという話は、九八年十一月に東京で発案されたものである。一月に続き年内二度目の来日を果たしたトゥーサンと、あるシンポジウムの打ち上げで杯を交わしつつ、『アイスリンク』の日本公開は早々に決定しているのだから、シナリオを本にしたらいいのではと訳者から提案してみたところ、焼き鳥の串を片手にトゥーサンは一も二もなく賛成してくれたのだった。完成した映画のシナリオそのものではなく、本は本で別のディテールを含む、読者にとって面白く読めるものにしたいという思いを、トゥーサンはそのときすでにはっきりと口にしていた。とはいうものの、時間をかけて練りに練った脚本であり、出来ばえに彼はよほどの自信があったに違いない。出版のアイディアを

即座に受け入れたこともその表れだろう。ここに実現された決定版シナリオ——トゥーサン自身はそういってはいないが、決定版と呼んで間違いはないはずだ——は、大筋では映画と合致するものである。映画をはみ出す部分、トゥーサンが改めて「自分の好き勝手に」ふるまった部分を洗い出す作業は、熱心な読者にゆだねたい。たとえば監督役を「作家兼監督」と呼んでいることは、作品の自画像的側面をいっそう強調するものだし、ホッケー選手やアイスリンク経営者のせりふがより長く書き込まれていることには「読む」シナリオという点への配慮が感じられる。あるいは、映画で実現するにはいささか過激なアイディアをトゥーサンが膨らませていた事実は、アメリカ人スター男優の顔が繰り返し氷に「叩きつけられる」設定に明らかだろう。映画では氷面に激突するすれすれのところで止められているのだが、トゥーサンは気の毒なシルヴェスターをもっといじめてやりたかったらしい。いずれにせよこのシナリオは、

とりわけ実際の映画とのずれ、差異を通して、トゥーサンの監督としての夢や、小説家としての言葉へのこだわりを照らし出す貴重なドキュメントとなっている。

しかしながら、かつて自作映画のシナリオに「シネ＝ロマン」の名を冠して出版したアラン・ロブ＝グリエが強調していたとおり、本が映画そのものに取って代わることは決してできない。「序文」でこのテクストが、文学作品のようにそれ自体を目的とするのではなく、映画を目指して書かれたものであることを明記するトゥーサンもまた、ロブ＝グリエの先例をはっきりと意識している。従ってわれわれ読者としても、ありうべき映画を夢見るための糧としてこのシナリオを読むのがよいのではないだろうか。未だ『アイスリンク』を観ていない読者はもちろん、すでに実際の映画を観た読者であっても、別の映画をここから思い描くことができるだろう。興味深いのは、『アイスリンク』に結

集した素晴らしい俳優たちの多くが、まずトゥーサンのシナリオを読んで大変気に入り、進んでキャストに加わった人たちであるということだ。たとえばマリ＝フランス・ピジエ。トリュフォーやジャック・リヴェットやジャック・ドゥミら、ヌーヴェル・ヴァーグの数々の傑作のヒロインにして、セザール主演女優賞を二度受賞し、近年は小説家としての評価も高いピジエは、たまたまトゥーサンのシナリオを読んですっかり魅せられ、女性プロデューサー役をぜひやってみたいと自ら志願してきたのだった。あるいはジャン＝ピエール・カッセル。アイスリンク経営者役を演じた彼は、ルノワール、ブニュエル、ロージー、メルヴィル、アルトマン、シャブロル等、これまで最高の監督たちと仕事をしてきたベテラン男優である。その彼がトゥーサン作品への出演を決めたのも、シナリオがみごとな出来ばえだったからだったという。

どうか読者の皆さんも、彼ら名うての俳優たちが自分のもとに送られてきた

シナリオに目を通すときのような気分でこの一冊を開いてみていただきたい。どんな映画の可能性を読み取ろうとそれは読者の自由である。ある未知の、未完成な、来るべき映画のイメージがそこには生き生きと躍動しているはずだ。

★

映画『アイスリンク』は大映株式会社の配給により来春一般公開の予定。また今秋開かれる大阪ヨーロッパ映画祭でのトゥーサン特集において、ひと足先に上映される予定である。同映画祭に合わせてトゥーサンは、今年も来日することになっている。

本書の企画実現に向けて力を尽くしてくださった集英社翻訳書編集部の鈴木馨さん、そして鈴木さんが別の部署に移られたのち、編集の実務を引き継いで

担当してくださった岩本暢人さんに感謝します。撮影現場用語をご教示くださった鈴村靖爾さんにも御礼申し上げます。

一九九九年八月

野崎　歓